

# アフリカの政治的変容期における笑い<sup>1)</sup>

岩田拓夫

「笑いは悪魔的である。それゆえ深く人間的なものである。笑いは、優越性の認識に起因するものであり、本質的に人間的なものであり、矛盾に満ちたものである。」  
(Baudelaire 1855 : 20)

## 1. はじめに

21 世紀に入り、アフリカ諸国は国内外において急激な変化の只中にある。今や、アフリカ諸国は、欧米諸国や日本を中心とする国際社会から援助や介入にすぎるだけの「貧しい病人」とばかりには扱われないようになった。近年、経済危機に苦しんできたヨーロッパとは対照的に、経済発展を続けてきたアフリカに対して世界経済の牽引者の役割すら期待されるようになった。

その一方で、独立から概ね半世紀を経たアフリカ諸国の歴史は、軍事政権や一党制という権威主義的な政治体制を経験しながら、政治的な抑圧、経済政策の失敗、人権侵害、国家の崩壊・破綻などの苦難に彩られてきた。また、そのような状況は、冷戦時代の国際政治の産物でもあった。近年、アフリカ諸国が経済成長の段階に入ったものの、それは国際市場における天然資源の価格高騰によってもたらされた部分が大きく（平野 2013 : 76-87）、かつ国家間、国内における深刻な格差をとまなうものでもあった。

このような社会的、経済的、政治的状况の中で、社会科学的研究アプローチにおいてはアフリカの国家や社会が抱える問題や、その克服に立ち上がる活動により多くの関心が注がれてきた。そこでは、貧困、紛争、開発、人権、ジェノサイド、女性の権利侵害、感染症、難民、民主化の停滞もしくは頓挫、独裁的指導者の権力への執着、腐敗、麻薬取引・使用、破綻（失敗）した国家、経済成長における貧富の拡大、環境破壊、など、アフリカ社会における政治的社会的危機やガバナンスの問題が社会科学のアプローチによるアフリカ研究の中心的な問題関心となってきた。そして、そこには（外からの）「介入」的関心が暗黙の前提とされてきた。

上述のようなアフリカ社会を悩ます根深い諸問題は全て事実である。しかしながら、筆者を含め研究者がアフリカでの現地調査中に日常的に触れてきたのは、アフリカ社会を取り巻く深刻な問題に影響を受け、それらに日々悩まされながらも、単に人々は「悲劇」に打ちひしがれるだけではなく、「笑い」とともに「普通」に暮ら（そうと）してきたという至極「当たり前」の事実であった。むしろ、危機や脅威の局面であればこそ、社会の中でより「創造的な笑い」が噴出することすらあった<sup>2)</sup>。

小稿では、アフリカにおける政治状況の変化を通じて、笑いに質的变化が生じているのではないかという問題意識から出発している。翻して考えれば、笑いの質的变化に注目することに

よって、これまでとは違った角度・観点からアフリカ社会や政治の変容を理解することができるのではないだろうか。

それゆえ、本研究では笑いという極めて社会的な行為でありながら、社会科学の研究アプローチにおいては正面から取り組まれることが少なかった研究テーマにフォーカスすることを通じて、人々の暮らしにより近いミクロな視線も含めたアフリカ政治の変化に関する研究を試みたい。小稿では、アフリカの政治的変容期に人々の暮らしの中で笑いがどのように質的変容を遂げたかに焦点を当て、これまでの研究とは別の角度からアフリカ政治・社会の変化に関する理解を深めていきたい<sup>3)</sup>。

小稿においては、はじめに「笑い」に関する概念的検討を行ったのちに、アフリカ政治全般における笑いの意味について考察をおこなう。次に、筆者のフィールド調査国である西アフリカ諸国（ベナン、トーゴ、ブルキナファソ）を舞台に、民主化に代表される国家の行く末に大きく関わる体制移行を分岐点として、事例研究を通してアフリカにおける笑いと言政治変容の関係を考察する。

## 2. 政治における「笑い」

### 2.1 笑いに関する概念的考察

ここでは、アフリカ政治と笑いとの関係性について考えてゆく。その前に、笑いという概念自体についてたとえ不十分ではあっても、議論の混乱を避けるために最低限の考察をしておく必要がある。「笑う」という行為は、結果として生理学的行為<sup>4)</sup>として外部から観察可能な行為となるが、その大部分は社会・文化的行為に起因する。行為としての笑いに関する理解に際しては、あらゆる専門領域からの考察が可能であり、かつ多様な観点を包含する複合的な考察が求められる。それは、笑いとは人間の本質そのものが映し出される行為であるからである。

笑いは、日常生活から小稿のテーマであるアフリカにおける政治の世界まで、人間社会の隅々にまで満たされている。このような人間存在の本質に直結する笑いという行為をより深く、総合的に理解するためには、人文社会科学、自然科学の垣根を越えた、形而上学的な問題意識を兼ね備えた考察のアプローチが求められる。笑いという社会的行為は、その要因・プロセスは極めて複雑で学問的には多くの領域にまたがるものであり、単一分野からの考察のみによって決して完結させることはできない深遠な研究テーマである。

笑いの哲学的側面からの理解に関する代表的な著作（『笑い』、原題 *Le Rire*）の中で、ベルクソン（Henri Bergson）<sup>5)</sup> は、以下のように笑いという哲学的な考察対象の難題性について指摘した。

「アリストテレス以来、おえらい思想家たちがこのちっぽけな問題と取組んできたが、この問題はいつもその努力を潜りぬけ、すりぬけ、身をかわし、またも立ち直るのである。哲学的思索に対して投げかけられた小癪な挑戦というべきだ。」（ベルクソン 1976 : 11）

もっとも、笑いの本質に包括的に迫ることは筆者の限られた能力をはるかに越えている。そのため、小稿においてはあくまでもアフリカの政治変容期を理解するためのアプローチとして限定された特徴・側面に焦点を当てて、社会的行為、中でも政治に関連する笑いを考察することにおいて満足せざるを得ない。笑いに関しての完全な考察や理解は、いまだ人類にとって未踏の峯なのである。

「笑いとは何か。どうやって笑うのか。誰が笑うのか。なぜ笑うのか。誰を / 何を笑うのか、誰が笑わせるのか、誰と笑うのか、いつ、どこで笑うのか、笑いと笑いを誘うことの個人的機能と社会的機能とは何か。」(スマジャ 2011 : 43)

笑うという行為とは何か？これは、最初の問いでありながら、同時に究極的な問いでもある<sup>6)</sup>。笑いは、心理学、美学、文学史、社会学、哲学の境界において、言葉やジェスチャーをとともなう表現行為としての奇妙な、グロテスクな、もしくは狂ったものとして、レトリックの形式としての嘲笑、からかい、愚弄のような、ばかげたもの、皮肉、茶番、風刺、コメディーとして存在してきた (Noguez 2011 : 155)。

主要な辞書においては、以下のように「笑う」という行為に関する定義が行われている。

「喜びやおかしさなどの心情を表出する、声または顔の表情」(『広辞苑』)。

「おかしさ、うれしさ、きまり悪さなどから、やさしい目つきになったり、口元をゆるめたりする。そうした気持ちで声を立てる。ばかにした気持ちを顔に表す」(『大辞林』)

「喜びや時に愚弄の本能的表現として発声と顔と体の動きを同時にもたらすこと」(*Oxford Dictionaries*)<sup>7)</sup>

「騒がしい爆発からくすくすまでの声を伴い、おかしさ、陽気、喜び、幸福、時に不敬もしくは神経質を表現すること」(*Webster's dictionary*)

「発声を伴う唇、口の動きによる陽気な感情を表わすこと」(*Petit Larousse*)

辞書的な定義において、笑いは結果として何らかの形で顔の表情（全体もしくは一部）が変化し、声を発することを通して他者によって認識される（外部からの観察が可能となる）というおおよその共通点が見出される。

ベルクソンによれば、笑いは人間に特化された行為であるとされる。

「多くの人たちが人間を『笑うことを心得ている動物』と定義した。彼らは同様にまたそれを、人を笑わせる動物と定義することもできたであろう。」(ベルクソン 1976 : 13)

フランスの精神科医であるスマジャによれば、笑いとは社会的に「コード化」された「陽気な表情」とであるとされる。笑いは、パターン化された一定の社会的やりとりで決められた「集団の共通感情」を伝えるものである（スマジャ 2011：153）。

「笑いは、感情的な表情として、集団によって、集団のためにコード化された表現規範に従うことになる。それに伴って、笑いは、主体（年齢、性別、社会的ステータスによる）、文化、社会的枠組み、笑いを誘うメッセージの対象、意図、発信者に応じて（年齢、性別、社会的ステータスに応じて）許可されたり、命じられたり、禁止されたりする。」（スマジャ 2011：147）

笑いには何らかの社会的意味が込められていることが想定されるため、笑いについての考察においては、笑いという行為が行われる社会における役目に着目する必要がある（ベルクソン 1976：17）。笑いは、社会によって、社会内の集団によって、時代によっても変化する<sup>8)</sup>。喜びが単一の表現であるのに対して、笑いは両義的もしくは矛盾した表現である（Baudelaire 1855：25）。

スマジャは、社会的行為としての笑いについて以下のように分類している。

- 「一個人的喜びの表現、そして、集団の社会的まとまりから生み出される精神的安定＝安心感の表現
- 逸脱や常軌を逸した行為へのうわべだけの容認。風俗の社会的抑制という非常に効果の高い方法
- 消極的な容認による回避方法、すなわち、他人の攻撃を阻止することで制裁を回避する方法
- 挨拶の手段
- 不安から身を守る手段
- 社会的に閉めだす手段
- 魅了し、感情を探る手段」（スマジャ 2011：148）

またベルクソンは、笑いを催す誘因として「ぎこちなさ」のようなものによって生じる「滑稽さ」を指摘した。

「笑いを催させるものは、彼の態度の急激な変化ではなくして、変化の中にある不本意的なものであり、不器用である。」（ベルクソン 1976：18）

「自動現象、こわばり、刻みこまれて消えない皺、そんなものによって或る顔つきが我々を笑わせるのである。」（ベルクソン 1976：32）

「人間のからだの態度、身振り、そして運動は、単なる機械をおもわせる程度に正比例して笑いを誘うものである。」（ベルクソン 1976：35）

歴史を紐解くと、人間社会の統治に際して、人々は恐怖心を抱きながら、笑いに向き合ってきたとも考えることができよう。ボードレールは、神に生きる賢者は笑うことを恐れている。それゆえ、恐れおののき、震えながら笑うと述べた（Baudelaire 1855：8-9）。人間の笑いは、心身の悪化に直結していると考えられている（Baudelaire 1855：11）。笑いは、傲慢さと無分別などに基づく自身についての悪魔的な優越感から生まれる（Baudelaire 1855：16）。また、19世紀半ばのボードレールの笑いにおける女性の役割は長きに渡って非常に限定されたものであったという指摘は（Baudelaire 1855：37）、今日においても構造的には大きく変化をしていないように思われる。

笑いを生み出す要素や条件については、普遍的な特徴を指摘するのは決して容易なことではないが、社会における笑いに限定して言えば、一定の社会的背景を踏まえて、あるきっかけが生じた際に、精神的に何らかの「ゆとり」が生み出される状況の中で笑いが生じると考えることができる。例として、以下のような状況を挙げることができる。

- ①欲求の充足
- ②（愉快的）意外性との出会い
- ③緊張状態からの解放
- ④社会的な埋め込みの中での慣習化
- ⑤優越感の確認・倒錯

上記の中でも、小稿のような政治との関連において最も直接的に関連するのが、⑤の優越感に関する領域であると考えられる。優越感とは、直接の政治アクター、間接の政治の傍観者を問わず、その意図の有無にかかわらず、政治プロセスの中で産出されるものである。以下では、政治における笑いの理解を目的とする小稿において、笑いの一つの特徴である優越の側面に注目して論を進めていく。

## 2.2 笑いの政治性

『悪の華』の作品で知られる19世紀のフランスの劇作家ボードレールは、「優越感」は笑いをもたらす重要な要因であると述べた（Baudelaire 1855：16, 20）。

この観点から見れば、笑いとは政治との間には密接な関連があると考えられる。むしろ、政治こそが笑いを作り出す人間の行為であり、かつ笑いが生み出される場であるとも言えるだろう。他人（集団）と比較して、自らの側が優越していると感じることができるとき、そこにある種の心理的余裕が生まれる。優越感（劣等感）が露骨に現れる政治という場において、笑いは不可避の手段、もしくは副産物として登場することになるのである。他者を見下しながら、自らの優越性を確認する際には笑いが生じうる。

スマ ज्याは、笑いの対象として、以下のように不変的な要素を挙げている。

- 「—笑う集団にとってのよそ者
- 集団内の逸脱者や変人

- 政治権力, 社会秩序, その他の権限, 制度
- 性欲
- 言葉づかい」(スマジャ 2011: 149)

冗談や人を笑い物にする行為は, 明らかに可虐的な要素を持っている (スマジャ 2011: 24)。政治学の古典的名著であるホッブスの『リヴァイアサン』の中にも笑いに関する言及がある。

「とつぜんの得意は, 笑い (Laughter) とよばれる顔のゆがみをおこさせる情念であり, それは自分のとつぜんの行為によろこぶことによって, あるいは他人のなかになにか不恰好なものがあるのを知り, それとの比較でとつぜん自己を称賛することによって, ひきおこされる。」(ホッ布斯 1993: 107-108)

プラトンによれば, 「笑いとは他人のおかしな点を看破することで生じうるひとつの快樂ということになる。ならば, これは嘲笑なのだから, 敵に対しては当然のことであり, 味方に対しては不当なことである。」(スマジャ 2011: 18)

キケローによれば, 「笑いが引き出されるのは, 予想を裏切ることによって, 他者の性質を嘲弄することによって, いささか醜悪なものを模倣することによって, そうではないふりをする皮肉によって, いささか馬鹿げたことを語ることによって, 愚かしいものを咎めることによって」である (キケロー 2005 下: 54)。

笑いは, 象徴的な死を伴う生活を引きずることを余儀なくさせるという意味において, 怒りよりも確実に相手を痛めつける (Peker 2011: 75-76)。また, 笑いはブルデュー (Pierre Bourdieu) の議論における「象徴権力」(le pouvoir symbolique)<sup>9)</sup>をめぐる政治の産物そのものであるとも言える。笑いは, 象徴権力をめぐる争いの一定の局面において表面化する現象である。笑いは政治研究においては, 重要な研究対象として扱われるべきはずテーマであった。

「笑いは何よりもまず社会的制裁を通じた矯正である。屈辱を与えるようにできている笑いは, 笑いの的となる人間につらい思いをさせなければならぬ。社会は笑いによって人が社会に対して振る舞った自由行動に復讐するのだ。」(ベルクソン 1976: 179)

笑いは, 処罰と平定的手段として, 愚弄の様式のもとで起こる (Gauvard 2011: 90)。また, 時には, 敵を攻撃するために用いられる (Gauvard 2011: 92-93)。愚弄の笑いによって傷つけられた名誉は, 同じく愚弄による笑いによって回復されなければならない (Gauvard 2011: 94)。しかし, 国家制度の確立とともに, 荘厳な儀式や司法制度にとって代わられた笑いの意味ははやけてくるが, 逆に大衆は笑いを通して国家秩序の脅威ともなる (Gauvard 2011: 97-98, 104)。

多種多様なテクニク (誇張, 緩叙法, 隠喩, 換喩, 反復法, 統治法, 反語法, ビュルレスク [高尚な題材と砕けた調子による文学様式], パロディ, 下ネタ) を駆使して, 笑いを誘うようにおもしろおかしく加工される。対象をつくりかえる遊びや愚弄の実践は, はっきりと対象を貶める。それによって, 人は「機械」や「物」のように扱われて笑いが生まれる (スマジャ



2011 : 149-150)。

次に、笑いの生じる過程について整理してみたい。

ペインは、笑いに関する「解放」(relief)と呼ばれる理解を示した。

「威厳があり、厳かで、落ち着いた状況からは、かなりの緊張と気詰まりが要求されるが、この気詰まりから不意に解放されると、その反動として、爆笑が起きるのである。」(スマジャ 2011 : 39-40)

ショーペンハウワーは、笑いに関する「不調和 (ズレ)」(incongruity) と呼ばれる要因を示した。

「笑いを誘うこと、ないし物笑いの種は、マナーの欠如、矛盾、不調和、突飛さのなかにあり、これらは、ひとつの概念と、その概念から連想された現実の客観との間に、つまり、抽象的表象と直感的表象との間に突然認められるものである。」(スマジャ 2011 : 36)

笑いは情動 (emotion) に関する表現である。笑いに関わる情動として、喜び、情愛、楽しみ、上機嫌、驚き、苛立ち、悲しみ、恐怖、恥、攻撃、勝利、あざけり、他人の失敗を望む気持ち (schadenfreude, ドイツ語) を挙げることができる (Schaeffer 2011 : 25-26, 下線は筆者)。

ここまでの議論を整理すると、笑いに関する哲学的考察を続けてきたモリオール (John Morreall) は、笑いの発生プロセスに関して、「優越に関する理論」(Superiority Theory)、「解放に関する理論」(Relief Theory)、「不調和に関する理論」(Incongruity Theory) という三つの伝統的理論があると分類した (Morreall 1987 : 5)。小稿において焦点を当てる優越に関する理論についての追加的説明は省略するが、それ以外の解放に関する理論においては心理的な緊張状態からの解放時に笑いが起きること、不調和に関する理論においては想定外のことが発生した時の現実とのギャップを感じた際に笑いが起きることが示されている (Morreall 1987 : 6)。

モリオールは、優越に関する理論においては、それ以外のケースで起きる笑い、たとえば乳児が外部からの刺激に反応して起こす笑いなどについて説明できないように、笑いの一般理論とはなりえないことを指摘した (Morreall 1987 : 129-130)。同様に、解放の理論も不調和の理論も、それぞれの理論単独では説明できない笑いの現象があり、笑いの発生のメカニズムを包括的に説明する「一般的理論」とはなりえない。しかしながら、モリオール自身も笑いに関する包括的な一般理論を示すには至らず、これら三つの笑いに関する伝統的理論は、単独ですべての笑いという現象を説明することはかなわないものの、それぞれの理論は笑いに関する重要な側面を描き出していると評価するにとどまらざるをえない (Morreall 1987 : 133)。

モリオールの提示した三つの笑いの理論においても、いずれの笑いの発生プロセスにおいても、結果として精神的な「ゆとり」が生まれることによって、(状況に応じて) 笑いをもたらしているという共通点を見出すことができる。この点は、笑いの発生プロセスの最終段階に関する共通性として、重要な意味を持つと考えることができよう。

宗教において笑いは微妙な距離感を保ちつつ、常に意識される行為であった。聖書においては、神、モーゼ、キリストは笑わない。キリスト教やユダヤ教においては、笑いは人間と悪魔の特性とされる (Steiner 2011:11)。「わざわざいなのは今笑う人々、あなた方は悲しみ泣こうから」(「ルカ福音書、6章25」)と、イエスは笑いを戒めた (湯田 1999:120-121)。それに対して、ニーチェのいう神の死後に現れる人間の真の目標としての超人は笑うのである (湯田 1999:118)。

しかし、ギリシャ神話のゼウス、ヘルメス、ヘラクレスは笑う。ギリシャの神々は、人間の卑劣さ、不条理、けちな苦しみ、幻想を笑うだけでなく、神々自身の不作法に際しても、喜びや茶目っ気を込めて笑う (Steiner 2011:11)。フランス語においては、「黄色い笑い」(rire jaune)という表現がある。これは、恐怖や失望をごまかす時のうすら笑いを意味する (Steiner 2011:18)。笑いには、人間が瞬間的に出会う不意の出来事に対する根本的な恐怖を鎮める働きがある (山口 1990:14)。

ここですべての宗教における笑いに対する考え方を検討することは叶わないが、単純化を恐れずに整理すると、一般に一神教において神は笑わないのに対して、多神教の神々の中には笑う神もいるという傾向はあるように思われる。

ここまでは、主に「笑い」という人間の行為そのものについて、その特徴と政治における関わり方について考察を行ってきた。筆者の限られた能力においては、「笑い」という極めて複雑な人間の行為についてすべて議論し尽くすことは到底かなわないものの、小稿における最低限の概念的考察と整理を行うことができたように思う。次に、アフリカ政治の実践における「笑い」の特徴とその実践に議論を移して行きたい。

笑いという人間の行為は、他者、他の存在とのコミュニケーションや交渉の中で生み出され、維持、変更されるものである。この観点においては、政治はいずれかの局面において、笑いとの接点を持つ人間の営為である。

笑いをポジティブなものとネガティブ (シニカル) なものに大別すると、本稿では政治実践により関わりが深いと考えられるシニカルな部分に焦点が当てられることになる。もっとも、あくまで考察のための便宜的なアプローチであるにせよ、笑いという行為をポジティブとネガティブの基準で分類することへの問題と分析上の有効性に関する疑問を完全に拭い去ることはできない。何をもち、笑いにに関してポジティブと位置付けるのか、ネガティブと位置付けるのかについて、必ずしも明確で一般化された基準はない。それは、社会、文化、時代の文脈に左右されるものでもある。ここでは、政治に関連する観点から、ポジティブな笑いは、主体と他者との間に必ずしも優劣関係を伴わない、もしくは両者を同じベクトルにおいて満足や共感を得られるポジティブサムの関係と位置付けることができよう。それに対して、ネガティブな笑いとは、主体と他者との間の優劣関係から逃れることができず、両者の相対的な優劣関係が露骨に示される時に生み出される笑い、つまりよりゼロサムの関係にあると位置付けることができるように思われる。

ただ、現状では、これらの分類は分析上の便宜的思索の域にとどまっており、依然として政治における笑いの研究におけるモデルとなるものではないものの、本稿においてアフリカ政治における笑いを考える上では、一定の有用性を見出すこともできると考えている。



### 3. アフリカ政治と笑い

これまでの考察を踏まえて、アフリカ政治における「笑い」の理解を目的として、主に優越に関する理論を中心に考えると、抑圧的な政治状況において笑いの生じる一つの契機として、瞬間的に発生する権威の失墜を通じた心理的権力関係のつかの間の倒錯を想定することができる。

ブルデューの考え方を再び借りれば、長期にわたって重苦しく存在し続けてきた「象徴権力」を切り崩すような象徴資本の急激な移転や減少による相対的な権力関係の大きな変化を生み出すものとなろう。それによって、象徴権力が危機に瀕するような状況となる。この過程に焦点を当てたアフリカ政治研究に「下からの政治」(le politique par le bas)<sup>10)</sup>という研究アプローチがある。象徴権力の観点から見れば、「下からの政治」とは政治的弱者によって場当たりの繰り広げられる象徴闘争（逃走）であるとも言えるだろう。

1980年代のフランスのアフリカ政治研究において大きな関心を集めた「下からの政治」研究が注目したのは、目に見える形で出現する政治行動に至る前段階の日常生活の中で繰り広げられる、政治性を帯びた日々の手管(tactiques)やほのめかしなどを通じてにじみ出てくる「政治的な事象」(le politique / the political thing)であった。「下からの政治」は制度的な観点からは見えにくいアフリカの国家の性格を拾い上げ、政治的周辺に置かれた人々の権力との関わり方を描く方法を提供する（岩田2006：172）。

「下からの政治」と聞けば、抑圧や疎外を受けてきた社会層やアクターによる国家や支配層に向けた抵抗の政治行動がイメージされるかも知れない。しかし、ここでいう「下からの政治」は、その潜在性を含みながらも、実際の行動は権威主義的な国家、権力構造に敢然と立ち向かうことには必ずしも直結しない。権力に対する「闘争」というよりは、権力からの心理的「逃走」（息抜き）の側面が強い。むしろ「下からの政治」は「正義」や反国家であることを前提とはせず、これまで支配や権力に対して、政治的に受動的な主体としてのみ認識されてきた人々や集団がしたたかに生き延びようとする営みであるといえる。いわば、「政治社会」から蚊帳の外に置かれた人々や社会層における必ずしも対決的ではない政治的な関わり方(political engagements)である。「下からの政治」は選挙、政党や利益集団などを通じた通常の政治的意思表明方法以外のルート、手段を通じて展開される政治的行動やふるまいであり、またそのことを理解することを重視した政治研究アプローチであった<sup>11)</sup>。一般に、政治に関するジョークは権力に対する積極的な抵抗というよりは、日常生活における気晴らしのひと時をもたらすもの(Herzog 2013：13)であると考えの方がより適切であると言えるだろう。

一例として、岡崎によれば、「ガムク」と自称する南北スーダンの境界地帯に住む人々は、現状に対する笑い飛ばしを通じて日々の生活につきまとう不安とやりきれなさを克服しようと試みる。

「まずよくやるのが、言い換え。ガムクの若者は強制的に北の政府軍の軍事教練に狩り出されるが、北部軍の指揮官を横に見て走りながら歌うアラビア語の軍歌の歌詞の一部を、北部人にはわからないようにガムク語に換えてしまう。例えば「アッラー・ア

クバル（神は偉大だ）」を「アラーベロベル（あんたのケツの穴をひっぱたいてやるゾ）」とか「行くぞクルムック（戦場の地名）へ」を「行くぞエ・クルムック（素裸で）」というように。もちろんそこでは笑わずに皆可笑しさを押し殺す。」（岡崎 2003：96）

しかし、同時に岡崎は、それが一概に権力に対する抵抗となるとは限らないことも指摘している。

「例えば、チャルーク（道化師のような笑い専門家たち）は権力を振り回す者を批判しているというより、ただ単に皆で笑い飛ばすと楽しいという気持ちだけでやっているとしか思えない。そして実際に、権力を振り回している者すら、一緒になって笑ってしまうということがよく起こる。ここらへんにこそ、これからの社会運動の方向を示す深い知恵が隠されているのかもしれない。」（岡崎 2003：98）

この指摘は、「下からの政治」とも通じるところもある。つまり、象徴闘争の中に抵抗のベクトルを見出すことができるとしても、それは「単一」の方向に結集されるとは限らず、むしろ「分散的」に逃走の側面も含みながら行われるものでもある。

宗教的慣習の観点から笑いを考察するにあたり、一例として西アフリカのギニア湾岸諸国（トーゴ、ベナン、ナイジェリアなど）で継承されてきた伝統的宗教であり、その信仰体系であるヴォドゥン（Vodoun）<sup>12)</sup>において、精霊的な役割を果たすレグバ（Lègba）という存在を指摘することができる。一般的に、レグバは西アフリカのベナンで言い伝えられる一種のトリックスター<sup>13)</sup>として認識されている。レグバは、家長の守護霊、神々の使者であるが、ときに悪ふざけもする。また、ヴォドゥンでは祖先神、扉や街道など異界との境となる場を司り、神と人との仲介役と考えられているトリックスターとは、「主として民話や神話のなかに登場し、縦横無尽の活躍をする小悪魔、あるいはばてん師、詐欺師」のことを指す（小川 1985：9）。このトリックスターという存在は、家長の守護霊、神々の使者であるが、ときに悪ふざけもする。

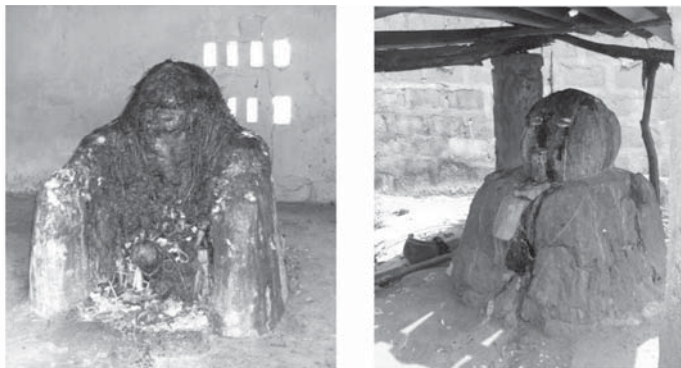


図1：レグバ（Lègba）

（出典） Monde Blog（Radio France Internationale）<sup>14)</sup>

レグバは、神と人間との間のトラブル・メーカーとしても登場する。レグバは、コミュニケー

ション (連絡・交渉) の神でありながら、抜け目なく行動し、いたずらをして、人間世界を混乱させる。そのいたずらの過程で笑いを引き起こす (スマジャ 2011: 143)。

レグバは、守護神であり、神々からのメッセージの伝達者であり、調停者である (*Culture et tradition du Bénin*: 35) <sup>15)</sup>。村や家屋や市場の入り口に作られた土塊によって物質化される。レグバの能力はすさまじく、時に神をも欺き、病や死を遠ざけることができる。しかし、逆に機嫌を損ねると、人間に対してあらゆる災厄をもたらす存在となる <sup>16)</sup>。人々は気まぐれで荒ぶる神に、供物と引き換えに自らの願いを伝える (田中 2009: 44-45)。

山口 (1974) によれば、「トリックスターの神話論的破壊作用の中に、笑いは、本来なら出会わないはずの二つの論理的クラス (範疇に近い言葉として理解しておく必要がある) の間の出会いとショックの結果として現われる」 (山口 1974: 300-301)。

次に、エンターテインメント (「お笑い」) の観点から、アフリカ政治と笑いとの関係について考えてみたい。エンターテインメントとしての笑いのジャンルに関しては、日本において落語、漫談、漫才、モノマネ、トーク、コメディードラマ、コント、パンマイム、人形使い、腹話術、曲芸、マジック、など多種多様にわたるが、アフリカにおいても同様である。アフリカ各国において必ずしも一様ではないが、一般的なエンターテインメントとしての笑いのジャンルを挙げると、広く見られる形態に一人舞台で行うスタンドアップ型のトークやコントがある。次にテレビ向けのコメディードラマが挙げられる。

日本においても、お笑い芸人として専業で生計を立てられる人々はごく一部であるが、アフリカ諸国ではさらにその傾向が強くなる。アフリカ諸国において、産業としての笑いのエンターテインメントは依然として萌芽状態にあるものの、近い将来において急成長が見込まれている領域でもある <sup>17)</sup>。小稿において、経済発展と産業としてのエンターテインメントの成立との関係について論証することはできないものの、お笑いにとどまらず、音楽、アートを含めても、アフリカ諸国において芸人が専業で生活を営むには国内の市場は小さすぎ、国際的に活動の場を広げる以外の方法はないだろう <sup>18)</sup>。実際、多くのエンターテイナーにとっては、お笑い芸人としての活動は自己資金の持ち出しとなり、生活を維持するために他の職業に就く必要に迫られているのが現状である。

ブルキナファソを代表するコメディアン「ジェラルール・ウエドラオゴ閣下」 (Son Excellence Gérard Ouédraogo) <sup>19)</sup> の代表的持ちネタは、同国を 30 年近く率いてきたコンパオレ大統領 (Blaise Compaoré、在任 1987 年～2014 年) のモノマネである。

次に、国境を超えて広がりを見せるアフリカの笑いのパフォーマンスについて紹介したい。フランスの国際ラジオ放送 (Radio France Internationale) に、ニジェール出身のコメディアン「ママヌ (Mamane)」が担当する「滅茶苦茶民主的な Gondwana 共和国」 (République très très démocratique du Gondwana) <sup>21)</sup>



図 2: ブルキナファソを代表するコメディアン、ジェラルール・ウエドラオゴ閣下のライブポスター

(出典) Son Excellence Gerard Ouédraogo フェイスブック <sup>20)</sup>

という名物コーナー（約3分間、平日朝に放送）がある。

ニジェール出身のコメディアン・ママヌ（Mamane）は、一人トーク芸（Stand up）を中心に活動するコメディアン（フランス語では humoriste）である。少年期をコート・ジボワールやカメルーンでも過ごし、1990年代はじめに博士課程への進学（植物生態学、モンペリエ大学）のためにフランスに渡った。学位取得後、フランスにて職探しをするも労働居住証が出されず一時期不法滞在（sans-papier）状態となる。そのような困窮した状況において、劇団の演出家であるルクレルク（Frédéric Leclerc）と出会い、コメディアン（comédien-humoriste）として歩み出した。2002年から、コメディの独り舞台（One Mamane Show）をはじめ、複数の劇団にて活動し、2006年からテレビに出演を始める。中でも、彼の名を広く知らしめたのはフランス国際ラジオでの名物コーナー（Chronique de Mamane）を担当するようになってからである<sup>22)</sup>。

アフリカのどこかにある架空の国家「滅茶苦茶民主的なゴンドワナ共和国」における国家元首を中心に繰り広げられる政治的エピソードを風刺的に語るコーナーが人気を博し、やがて、「ゴンドワナ共和国」の活動の場はラジオを飛び出した。フランス語圏アフリカ諸国で活躍するコメディアン・ネメル（Kader Nemer）、ゴウ（Michel Gohou）<sup>23)</sup>、ダイコ（Adama Dahico）、クラバット（Digbeu Cravate）も加えながら、時に集団パフォーマンスへと展開していった。



図3：コンゴ民主共和国で開催された笑いの祭典のポスター  
（出典）Festival du rire フェイスブック<sup>24)</sup>

このゴンドワナ共和国のメンバーは、フランスだけでなく、アフリカ各国（仏語圏に限る）を回りライブ活動を行うようになった。このゴンドワナ共和国のコーナーでは、特定の国家、政権を名指して批判することはないものの、内容を聞けばモデルとされた当事国の人々には笑いのネタとされている人物は一目瞭然のものとなる。そこでは、リスナーの多くを占めるアフリカの人々の日々の暮らしに重たくのしかかってきた国家指導者、権威主義的政治が風刺的に笑いを交えながら揶揄されている。このように、ママヌによるワンマンショー活動と並行して、グループ活動をまじえながら、活動がさらに国際化されていくという展開を見せている<sup>25)</sup>。

ママヌは行動するコメディアンとも評される。自身がフランスで味わった苦難も背景にしながら、ユーモアと風刺を交えながら、グローバル化、移民政策、国際政治、偽善、アフリカの



国家、日々の暮らしにまつわる問題をやり玉に挙げている<sup>26)</sup>。アフリカの政治指導者たちは、人々が極力政治的に無感覚になるように仕向けているが、笑いを通じて深刻な問題を茶化しながら政治的感覚を維持し続けることができると考えている<sup>27)</sup>。

しかし、エンターテインメントとしての笑いの国際化には、ベルグソンが「滑稽な効果の翻訳はできないものである」(ベルグソン 1976: 16)と述べたように、言語の壁が存在している。笑いの多くが言語によって構成されることを考えれば、自然な現象であるとも言える。ゴンドワナ共和国の実質的な国境は、仏語圏アフリカが非仏語圏アフリカ地域と接する境界線となっている。その先には、ゴンドワナ共和国は認知さえされていないのが現実である。同じく、非仏語圏のアフリカにおける笑いは、仏語圏にはほとんど流入していない<sup>28)</sup>。

#### 4. アフリカにおける政治変容と笑い

アフリカにおける政治変容と笑いとの関係を考察することを目的とする小稿において、重大な政治的局面を転換点として二つの時期に大別しながら、笑いの質的変容を考察したい。本節では、ベナン、トーゴ、ブルキナファソの事例に依拠しながら考察する<sup>29)</sup>。

##### 4.1 ベナン

独立後のベナンの政治史において、独立から最初の30年間は軍事政権と抑圧に飲み込まれた時期であり、国民会議後の20年あまりは「民主化のモデル」としてよめきながらも政治改革のあゆみを続けてきた時期であったといえる。そこで、本稿では独立後のベナンにおいて民主化開始を分岐点として二つの時期に分けて、政治状況の根本的な変化と笑いとの関係性について考察していきたい。

ベナンは、1960年にダホメ共和国として独立した。ダホメは、独立直後の政情不安に苛まれたアフリカ諸国を象徴するような政治的あゆみを見せた。独立から12年間の間に6度の軍事クーデタによる政権奪取が行われた。最後となった1972年のクーデタを指揮したケレク(Mathieu Kérékou)は、1974年にマルクス＝レーニン主義を国家教義とすることを掲げ、翌年には国名をベナン人民共和国に改称し、「革命政権」を名乗り東側勢力への接近を図った。ケレク大統領を党首とするベナン革命人民党(Parti de la Révolutionnaire Populaire du Bénin)による一党制が敷かれ、政治的自由は大きく制限されることとなった。一党制を基盤とした革命政権において、言論・組織・集会の自由は厳格に制限された。このように独立から民主化開始までのベナンの政治は、典型的な権威主義のあゆみをたどった。

次に述べるトーゴのエヤデマ大統領と同様に、ケレク大統領もフランス植民地軍出身の軍人指導者で、同じように軍事クーデタによって政権を奪取し、加えて同じ世代で開発の遅れた地域の出身者(両者の出身地域自体も地理的に近い)であるなど多くの共通点があるが、両国内の人々における両者の指導者像は異なっている。軍人出身で暴力によって権力を奪取した指導者としては、エヤデマ大統領のケースが典型的なように、出身地域に優先的に開発のための資源を回し、強い指導者像をアピールするための労苦を惜しまないのが通常であった。そのため財源確保のため、国庫を迂回して大統領が直接管理する口座に資金が流れる仕組みを構築し



た。そして、国庫から掠め取りながら蓄積された個人資産は、自身の出身地の整備や宮殿や飛行場の建設に回され、その他の膨大な資産は海外に移された。これが、古典的なアフリカの指導者のふるまいであった。結果、権力の座から追放された場合、その都度「前」国家指導者の海外における隠し資産の存在が国内外に曝されてきた。

一方、ニックネームが「カメレオン」であるように、ケレク大統領の人物像はつかみどころがなく、謎めいた指導者であった（Iroko 2001：12, 25）。通常、国家指導者は、己の存在を国民に対して最大限に可視化させ、心理的にも圧倒して支配しようと試みるのが通常であるが、ケレクはその例に該当しない。むしろ、逆に自身の存在をつかみどころのないものによって、人々から「畏れ」を引き出そうとした感がある。しかし、それが意図的であったのすら、つかみがたいのが実情である。しかも、出身地域への優先的な開発を行わず、地元の住民は不満を口にしていた。海外での資産についても、これまでほとんど報じられることがなかった。ケレクは蓄財のために権力を欲するのではなく、権力のために権力を愛する（Chabi 2013：40-41）と評される所以である。



図4：写真：ケレク大統領（1972-1991, 1996-2006）  
（出典）Fondation Mathieu Kerekou フェイスブック<sup>30)</sup>

小稿の第二節において笑いに関する概念的検討を行った際、キリスト教の「神は笑わない」という一節を紹介したが、絶対的な存在である神が笑わないように、強い指導者像を誇示しようとする指導者ほど、自らが笑いの主体者・対象とされることから距離を置く傾向が出てくると考えることができる。この観点からすると、トーゴのエヤデマ大統領は「笑い」を作り出す主体者として打ち出されることはなかった。その一方で、時にケレク大統領は笑いの「作り手」として、しかも屈折した笑いの主体者としての姿を人々の目前にさらしてきた。そして、笑いによって、対抗者の象徴資本（イメージ面での影響力）を損傷させてきた。しかし、ケレクのシニカルな笑いは、敵対者のみならず、支援者、そして自らに対してまでも向けられた。

革命婦人部 「大統領殿。いかなる場合であってもベナンの革命婦人はあなたの後についていきます。」

ケレク大統領 「ご婦人殿の新たなる信頼に感謝します。確かにあなた方は私どもの背

後にいらっしゃいます。特に、（後ろから）私たちが穴に押し込めることも。」（Chabi 2013 : 101）

さらには、その皮肉めいた笑いはケレク大統領自身にも向けられた。外国人記者によるベナンの抑圧的な政治状況に関する質問に対して、ケレク大統領は次のように返答した。

「記者氏よ。貴殿は私たちのベナンという民主的で人民的（populaire）な国家の憲法を良く読んでいないように思われる。憲法のどこにもベナンの大統領は人気者（populaire）であるとは書かれていない。」（Chabi 2013 : 61, 下線部は筆者による）

しかし、ケレク政権は、時間ともに経済状況を見放したバラマキのつけを払わされることになった。国家財政の破綻とともに公務員への給与の遅配は常態化し、国民の不満は高まる一方となった。このような状況において、人々の間ではひそかに、国家教義とされてきたマルクス＝レーニン主義（Marxisme-Léninisme）をもじって「ベナン放漫主義」（Laxisme-Béninisme）という揶揄表現が広がっていった（Banégas 2003 : 52）。

トーゴのエヤデマ大統領と比較すると、ベナンのケレク大統領は相対的に自身が笑いの対象として世間にさらされる機会があった。とはいえ、他のアフリカ諸国の例にもれず、「革命」政権を率いるためには「強く偉大な」革命的国家指導者像を示し続けることは必要であった。そこで、当時、唯一の日刊紙（国営）であったEHUZU（現地のフォン語で「変革」の意味）の記事の見出しが、誤植に気づかずに「メッセージ」（Message）とするところを「ケレク大統領によるイギリス女王へのマッサージ（Massage du Président Kérékou à la reine d'Angleterre）」（Chabi 2013 : 48）とされたまま発刊・流布されたことは、政権を慌てふためかせた。

ベナンは、ケレク政権発足後、東側諸国からの支援を当てにしてマルクス＝レーニン主義に基づく革命政権の旗を掲げてきた。革命政権の指導者が、かつての帝国主義や（新）植民地主義の象徴的存在であったイギリス女王をマッサージするとは何とも決まりが悪いものであった。一方、（疑似的）革命政権下で政治的抑圧に苦しむ多くの人々にとっては、つかの間の心の清涼剤となっただろう。

1980年代後半になると、多くのアフリカ諸国においては、肥大化した政府、非効率な国営企業を抱えながら、深刻な経済不振を経験し、人々の不満は年々高まっていった。1980年代末には、治安部隊による弾圧にもかかわらず、生活改善の要求から発展した民主化を求める運動が日増しに拡大することになり、政府機能はマヒすることになった。

1980年代後半から高まり続ける民主化運動に抗し続けることができなと考えたケレク大統領は、1990年には民主化に移行することを前提とした国民対話フォーラムである「国民会議」（Conférence nationale des forces vives de la nation）<sup>31)</sup>の招集を受け入れた。国民会議によって設置された暫定的政府機構を主権行使主体として、民主化のために政治制度の変更を行い、またそれまでの政治プロセスを振りかえりながら国民的な和解を行うことを目指した。一年をかけておこなわれた民主化に向けた法整備・制度変更を経て、翌年、大統領、国民議会選挙が行われ、ソグロ（Nicéphore Soglo）率いる新体制が発足した。国名は、ベナン共和国に改められた。

5年後の大統領選挙では、かつて17年間ベナンの「革命」政権を率いて、国家の経済を疲弊させてきたケレクが選出され、国際社会を驚かせた。しかし、今回は軍事クーデタによるものではなく、比較的公正な選挙と候補者間の調整（談合）による権力への復帰であった。

民主化開始後のベナンでは、さまざまな紆余曲折、政治的危機を経験しながらも、軍事クーデタなどの超法規的な暴力による中断もなく、5度の大統領選挙と6度の議会選挙を経て、平和裏に3度の指導者の交代が行われた（2015年末現在）。そして、単に選挙が繰り返されるだけでなく、その経験の蓄積を経て、選挙の実施や監視体制も徐々に改善されている点も見逃せない。そして、政治社会の外の報道、市民活動も拡大している。民主化の開始をもたらした現憲法の内容を遵守し、民主主義の価値が国民レベルでより広く共有されようとしている。そのようなベナンの民主化のあゆみは、アフリカ大陸レベル、国際社会のレベルにおいてアフリカの「民主化モデル」として広く認識されている。

このカレンダーは、大統領選挙（2006年）期間中に街角の新聞スタンド売られていたもの（600FCFA；約120円）で、民主化後の二人の大統領とこの選挙の主要な候補者の顔写真をコラージュしている。このカレンダーには、笑いを誘いながらも、政治屋たちは額に汗して労働せず、政治ゲームに明け暮れていることに対する不満のメッセージが込められているようにも思われる<sup>32)</sup>。

ケレク大統領は、独立後のアフリカ諸国の中で、唯一と言っていいほどの数少ない、二度にわたり平和裏に指導者の座を退いた国家指導者ということができよう。民主化開始の時を告げた国民会議開催に先立って、国家教義であったマルクス＝レーニン主義を放棄したケレクが権力の座に復帰した際（1996



図5：歴代大統領・候補者を揶揄するカレンダー  
（出典）ベナンにて筆者が購入（2006年3月）

年）、前回の政権時代（1972～91年）の教訓から、自らの行動を束縛するようないかなる公式のスローガンも掲げられることはなく、権力維持を最優先の目的とした実用主義的な政治を実践するようになった。ケレクが政権復帰を果たした1990年代中旬は、援助ドナー国を中心とする国際社会においては、アフリカ諸国に対して一律に民主化を求める動きは勢いを失いはじめ、それと入れ替わるように、より行政面での改革を求める「グッド・ガバナンス」というスローガンのもとで援助が動かされるようになっていた時期であった。

国際社会が求めた「グッド・ガバナンス」や汚職撲滅運動に対して、ケレク大統領は国民に向けて、次のようなスローガンを発した。

「もし国民の皆さんが（汚職撲滅に向けた）準備 OK なら、私たちも準備 OK だ。」  
（Chabi 2013：154）

これは1980年代末のような国民的な合意と団結を見せた民主化運動とは異なり、汚職撲滅運

動に対して人々の間における国民的コンセンサスがないこと、それよりも人々は結局のところ胃袋を満たすための行動を優先させることを見透かした上での皮肉を込めた表現であったとされる。

国民会議を経て、国民的意思によって政権選択を行うことが可能になって20年あまりを経て、アフリカにおける「民主化のモデル」を自負するベナンにおいても、民主化に対するマンネリ感が色濃く漂うようになった。独立以来、繰り返される軍事クーデタによる奪取、17年間続いた疑似革命政権下の抑圧と経済の破綻を経た末に、政治を国民の手に初めて取り戻した国民会議であったが、国民会議とそれ以前の悲惨な時代の記憶は時とともに薄れゆくことは抗しがたくなっている。民主化によって、人々が期待した生活の劇的な向上は実現せず、時間ともにもはや「特別」なことではなくなった政治参加への熱意は薄れていった。

国民会議の記憶が年々薄れゆく一方で、民主的政治の土台である法の支配に対する挑戦の誘惑が指導者につきまとうようになった。民主化開始から10年余り（多くのアフリカ諸国の憲法においては大統領の任期は、1期5年で2期までに制限されている）を経て、すでにいくつかの国で、民主化を期に制定された憲法を修正し、大統領の任期制限を撤廃された。それらの国々は、以前から民主化に対して後ろ向きな態度を示し続けてきた国々であったが、「民主化のモデル」を自認する国の指導者にとっても、憲法修正による自身の任期制限撤廃の誘惑からは無縁ではなかった。

2006年の大統領選挙において、銀行家としてクリーンな政治を期待されて当選を果たしたヤイ（Boni Yayi）大統領の最終任期終了（2011年に再選）は2016年となっている。再選直後より、憲法修正による実質的な「終身大統領」化を目指す動きに関する噂は絶えず、野党を中心に憲法修正に反対する運動が繰り返されてきた。以下の新聞紙面上の風刺画は、憲法修正を画策する大統領を揶揄しながら非難している<sup>33)</sup>。

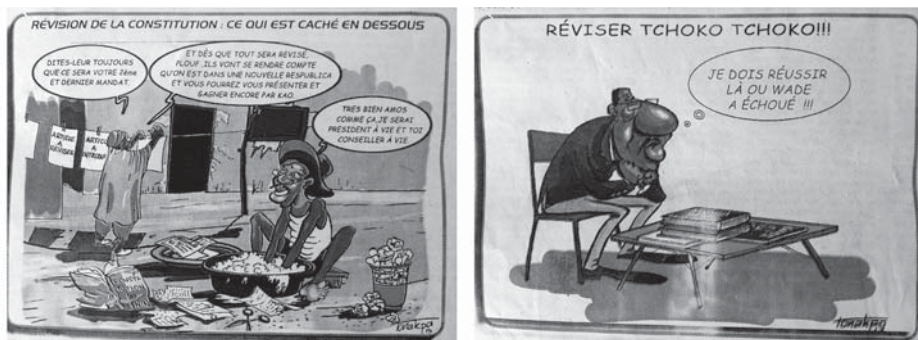


図6：大統領任期制限撤廃を目指す憲法修正の動きを批判する風刺画

（出典）Le Matinal紙（ベナン、2013年8月5日、6日）

アフリカにおける「民主化のモデル」を自認するベナンにおいては、政治発展に関しては紆余曲折を経ながらも、一貫して言論の自由は確保されてきた。そこでは、政治に関連する笑いの側面においても新たな展開を見ることができる。



## 4.2 トーゴ

1960年に独立を果たしたトーゴでは、独立時の指導者であるオリンピオ（Sylvanus Olympio）大統領が1963年にフランス植民地軍の退役軍人らによって暗殺された。その後、オリンピオ暗殺を指揮し、武力によって権力を奪取したエヤデマ政権（Gnassingbé Eyadéma, 1963, 1967～2005年）が40年近く続いた。エヤデマ大統領の病死後、息子のニヤシンベ（Faure Gnassingbé, 2005年～）に権力が継承された<sup>34)</sup>。

トーゴは、アフリカ諸国の中であって、1990年代初めの民主化の波にも飲み込まれず、より強固で長期にわたる権威主義的で抑圧的な政治体制を維持した末に、父から息子へ政権が世襲された国<sup>35)</sup>として知られている。このような長期にわたる権威主義的な体制下においては、政治的に安定している時期には体制を批判する声を公に挙げることは容易ではない。そのような政治社会状況においては、「笑い」の表出のされ方はより陰にこもった、間接的、暗喩的なものとなるだろう。

前節で紹介したアフリカにおける「下からの政治」研究において、長年にわたりトーゴ政治を研究してきたトゥラボ（Comi Toulabor）によれば、反対者への徹底的な弾圧や亡命者の増加の一方、個人崇拜の儀式が繰り返されてきた。1970年代に、「真正主義」（Authenticité）とともに、モブツ大統領（Mobutu Sese Seko Kuku Ngbendu wa za Banga）のザイル（現コンゴ民主共和国）の手法を踏襲し、加えて北朝鮮からマスゲーム専門家を招いて指導を仰ぎながら「アニメーション」（animation）<sup>36)</sup>と呼ばれる歌と踊りで指導者と、その指導者によって創設された国内に唯一存在する「国民政党」をたたえる手法を定着させた。そこには、上から「作られ」、「強制された」歓喜の笑いがあった。軍と経済という物質的な政権基盤を前提としながらも、一方で権力の象徴的土台作りにも意匠を凝らした。人々は表面的にはエヤデマ将軍に賛美を捧げてきたが、時とともに一人の手に権力と富が集中する状況に違和感と不満を抱かないはずはなかった。

このマンガ本は、エヤデマ政権発足から10周年を記念して作成された。この出版の目的は、オリンピオ大統領暗殺の理由と軍隊の政治的役割を正当化し、そして何よりエヤデマ将軍の存在そのものを神話化することによって権力を正統化するためのものであった（Toulabor 1986: 32）。そして、この本は一部で初等教育でのテキストとして使用されたと言われる。エヤデマ大統領の偉大さを子供たちにまで植えつけ、独立後のトーゴの歴史をエヤデマ将軍の個人史一色に塗りつぶすことを目的としたが、のちに現職大統領に対する暗殺シーンが血塗られたイメージを植え付けることが問題視され、当局によって回収された。

トーゴにおける「下からの政治」は、強固なエヤデマ体制に正面から対抗するのではなく、腐心して作り上げられてきた象徴資本を浸食することにつながる斜に構えた嘲笑／愚弄（dérision）から始まった。トーゴでは、言葉のレトリックを通



図7：エヤデマ大統領をたたえるマンガ本  
（出典）*Histoire du Togo, il était une fois... EYADEMA* (1976)



じて、エヤデマ体制を称えるそぶりを見せながら嘲笑した。この嘲笑／愚弄の「下からの政治」は、カビエ（Kabyè）人を中心に北部出身者を優遇するエヤデマ体制下で、多数派でありながらも冷遇されてきた南部在住のエヴェ（Ewé）人を中心に、水面下・口コミで広がっていった。

この大衆的政治行動は、正面から体制を揺さぶるまでには至らなかったものの、体制への疑問を喚起し、大衆の政治意識を徐々に覚醒させる触媒となった。エヤデマ大統領の出身であるトーゴ北部の出身者を優遇する政権において、南部地域を中心とする大衆の間で、多重的な意味を持つ言葉によって表面的にエヤデマを賞賛すると同時に暗喩的に嘲笑／愚弄する受動的抵抗が展開された。首都のあるロメを含むトーゴ南部を中心に広く話されるエヴェ語やフランス語の同音異義語、類似語を加工して、エヤデマ将軍の「性獣化」（séxualisation）、「動物化」（animalisation）、「糞便化」（fécalisation）<sup>37）</sup>を通した嘲笑／愚弄表現の体系が作り上げられた（Toulabor 1992：109-114）。

たとえば、エヤデマを称える Tsala（ツァラ）という造語にベニスの意味を持たせてエヤデマの性欲の強さが強調され（Toulabor 1992：115-116）、エヤデマが1974年以降、モブツ大統領のザイルを模して導入した「真正主義」政策において公式に用いられるようになった真正名「ニヤシンベ」（Gnassingbé）をフランス語風に分解・変形させて、Grand（大きな）singé（猿）と動物化して愚弄した（Toulabor 1992：122-123）。エヤデマ大統領が創設した国家政党であるトーゴ人民連合（RPT：エール・ペー・テー）<sup>38）</sup>もフランス語風に Air pété（エール・ペ・テ：尻の匂い）と加工して嘲笑した（Toulabor 1992：125）。また、RPTを「RoPoTo」と加工し、排便時の音を連想させた（Toulabor 1986:305）。中国訪問時の晩餐会で毛沢東が声をかけた「チンチン」の意味が分からず、エヤデマが「トーゴ、トーゴ」と応え返したというエピソード<sup>39）</sup>、低学歴、ケレク（隣国ベナンの大統領）の料理人（Toulabor 1991:137-139）、エヤデマはズボンを「着る」（袖を通す）などの愚弄／嘲笑表現が（決して公の場では語られることなく）人々の暮らしの中で口伝いに広がっていった。

民主化に関しては、トーゴはベナンとは対照的な展開を見せた<sup>40）</sup>。同じく、国民会議の開催から民主化プロセスが開始されたものの、ベナンにおいては国民会議においてケレク政権時代に行われたことが公式に免責されたことによって、ケレク大統領をはじめとして旧体制の指導者が民主化を受け入れる道筋をつけたのに対して、トーゴの国民会議はひたすらにエヤデマ体制を断罪する場となり、与党RPTの資産凍結まで行おうとした。

不寛容な民主化プロセスの船出は、「下からの政治」の展開にも大きな影響を与えることになった。民主化の過程を通して、エヤデマ体制を支える権力の象徴部分を溶解させてきた「下からの政治」は、それまでの地下の言説から声高に、公の場でエヤデマ大統領個人とその体制を愚弄する言説に変化した。やがて、それはマスメディアを通しても行われ、積年の体制への恨みを人々の間で増幅し、結果として民主化を契機とした国民和解を困難にした。エスカレートした「下からの政治」の矛先は、エヤデマ大統領個人からその取り巻き、やがて北部出身者全体への恨みに転化され、植民地時代に生まれた南北間の相互憎悪の意識を激化させた<sup>41）</sup>。ベナンと比較すると寛容さに欠けたトーゴの民主化プロセスは、最終的には軍を握るエヤデマ大統領によって握りつぶされることとなった。

ベナンと対照的に、トーゴにおいては民主化によって政治や社会の仕組みの根本的な変化は

なかった。そこに残ったのは、運命論的諦観 (Fatalisme) であり、人々の間に無気力が覆い尽くすようになった (岩田 2002: 18)。人々は、もはやどのような手段をもってしても退場させることのできないエヤデマ大統領の死を待つしかなかった。エヤデマの愛称の「バオバブ」が深く広く根を張る性質から、権力の座から退こうとしないエヤデマに例えて揶揄した (岩田 2003a: 60-61)。しかし、先述のように、40 年近くトーゴを支配したエヤデマ大統領の死の末に人々が見たものは、国家権力の父から息子への世襲にすぎなかった。

民主化の展開に伴って、ベナンにおいては政治に関連する笑いの側面においても新たな展開を見せ続けているのに対して、民主化に頓挫し、旧来の権力関係が維持されてしまったトーゴにおいては、民主化に伴う笑いの「自由化」が起きることがなく、政治と笑いとの間の基本的な関係に変化は見られなかった。

#### 4.3 ブルキナファソ

1960 年の独立 (当時の国名はオート・ヴォルタ) 以来、ブルキナファソにおいては政治的不安定と軍による政治介入が繰り返されてきた。1966 年のラミザナ将軍 (Sangoulé Lamizana) によるクーデタによって、独立以来の政権を担ってきたヤメオゴ大統領 (Maurice Yaméogo) は権力の座を追われた。一旦民政移管されたものの、1974 年には再びラミザナ将軍が政権を奪取した。以後、1980 年にはゼルボ (Sayè Zerbo) による、1982 年にはウエドラオゴ (Jean-Baptiste Ouédraogo) によるクーデタによる政権奪取が繰り返され、1983 年のサンカラ (Thomas Sankara) らによるクーデタまで、立て続けに軍の政治介入が続いた。

サンカラが率いた革命政権 (1983-87) は、その急進的な改革によってアフリカのみならず、大陸の外にまで知られるところとなった。アフリカのチェ (Ernesto Che Guevara) とともに称されたサンカラであったが、性急で強引な改革に対する国内からの反発が高まる中で、次第に政権運営に行き詰まるようになった。1987 年にはやがて革命の「同志」であり、革命政権発足の立役者であり、政権発足後はナンバー 2 として実質的に政権を動かしてきたコンパオレ (Blaise Compaoré) が裏で指揮した軍事クーデタによってサンカラは暗殺され、政権が奪取された<sup>42)</sup>。

それ以来、コンパオレは大統領として 27 年間権力の座にとどまってきた。その結果、ブルキナファソは欧米諸国 (日本を含む) からアフリカ諸国全体の中で最も安定した政権と考えられるようになり、近年では、長老格の指導者として西アフリカ諸国における紛争の調停者的役割を担ってきた。また、近年、マリやナイジェリアなどでは、武装勢力が国内の一定地域を実質的に支配し、政府の統治が十分に及ばなくなった近年の状況において、政治的に不安定な西アフリカの地域的安全保障を考える上でも、西アフリカの中央部に存在し、大部分の隣接する国々が政治的に不安定な状況にあることから、ブルキナファソの安定は地政学的にも重要な意味があると考えられ、旧宗主国フランス、アメリカから軍事面の支援も受けてきた。

しかし、そのブルキナファソにおいても、他の長期にわたる権威主義的政権 (パーレ、トラオレ、モブツ、ベンアリ、ムバラク、カダフィ、などなど) の末路の例に漏れず、あっけなくその政権の終わりの日を見ることとなった。筆者も含む国内外のアフリカ政治研究者の予想を超える時期に起こされた政変によって、それまでアフリカ諸国の中で最も安定していると考えられてきたコンパオレ政権もあっけなく倒れた<sup>43)</sup>。

かつて、コンパオレは自身の政権を永続化させるため、民主化プロセスの中で制定された憲法を1997年に修正し、一度は大統領の任期制限を撤廃していた。しかし、国内外からの反発に加えて、コンパオレ大統領の弟が関わる他の重大事件（ノルベール・ゾンゴ記者暗殺）への非難を和らげるため、2004年に再び憲法を修正し、大統領の任期を5年二期までと制限する条項（37条）を挿入し、翌年の選挙によって新たに権力の座についた。新しい憲法で定められた最終任期の終了が2015年末に迫る中、コンパオレは三度目の憲法を修正し、再び実質的な「終身大統領制」への移行（退行）を画策した。しかし、今回の憲法修正の試みは国内から予想以上の激しい反発を受けただけでなく、これまで長年コンパオレを支えてきたブレーンや体制を実質的に設計してきた最有力側近<sup>44)</sup>が、2014年はじめにはコンパオレに見切りをつけ、当時の与党CDP（Congrès pour la démocratie et le progrès）から大量に離脱し、野党MPP（Mouvement du peuple pour le progrès）を結成した。

この有力側近の大量離脱は、2011年の大統領警護隊による反乱で、コンパオレの最大の権力基盤である軍隊における統制が効かなくなりつつある状況においては、政権にとってかなり重大なダメージであったはずであったが、影響力のある側近の離脱によってコンパオレに憲法を順守して名誉ある引退を諫言する者はもはやいなくなっていた。実際に、コンパオレ体制を支えてきたブレーンやイデオログが離脱した後のCDPは、国民向けの強い指導力を発揮することができなくなっていた<sup>45)</sup>。

このような状況の下で、2014年10月末、憲法修正のための最終手続きである住民投票を行うために、国民議会において憲法改正議案の採決が強行されようとした。それを契機に、27年間のコンパオレ政権の圧政、人権侵害、汚職などに対する人々の間の強い不満が一斉に噴出した。首都ワガドゥグを中心に数十万人規模の大規模デモが行われ、国民議会をはじめとして、政府機関、政権幹部の自宅、国営ラジオ・テレビ局などが相次いで襲撃された<sup>46)</sup>。治安部隊による制圧が不可能と判断した時点で、コンパオレ大統領は憲法修正を断念すると国民向けにテレビ演説を行った。しかし、演説以後もデモの勢いは衰えず、大統領辞任に要求が向けられた。翌日にはコンパオレの政治生命の終わりを判断した大統領警護特別部隊（Régiment de sécurité présidentielle）<sup>47)</sup>のナンバー2の地位にあったジダ（Yacouba Isaac Zida）によって、コンパオレ大統領の辞任署名が発表され、コンパオレはフランスの特殊部隊の手引きで隣国コート・ジボワールに脱出した。

その後、暫定移行評議会は、元外交官（元国連大使）のカファンド（Michel Kafando）を暫定大統領<sup>48)</sup>に指名し、政変によって実権を得たジダが民主化移行政府首相を務めることになった。このように27年間続いてきたコンパオレ政権があまりにあっけなく瓦解した急激な政治的変化は、如何にして「笑い」に影響を及ぼしたのだろうか<sup>49)</sup>。

アフリカ各国のコメディイにおいて、個人を露骨に特定しない形で軍人や「大統領」など国家指導者が笑いのモチーフとされることが自体は一般的である。それは、その国に住む人々全員に関わる対象だからであり、観覧者のほぼ全てが関係者であるため笑いの「ネタ」（パフォーマンズのモチーフ）として最も分かりやすいからである。しかし、大半のアフリカ諸国において言論の自由は現実的には大きく制限される中で、コメディアン本人の身の安全を考えれば、特定の権力者を直接的に笑いのネタとすることに対して慎重にならざるを得ない。（時の政治状況

によって変動する) 一線を越えれば、国家指導者に対する中傷罪 (Defamation) で訴追や迫害を受けるリスクも十分に想定して活動しなければならない。裏を返せば、国家指導者を笑いのネタにできる国には「最低限」の言論の自由が保障されているとも言える。

「ジェラルール・ウエドラオゴ閣下」という芸名 (本名は、ジェラルール・ウエドラオゴ) は、大統領「閣下」(フランス語で *Son Excellence*, 英語では *His Excellency* に相当) を連想させるように、自国の大統領のモノマネを打ち出して活動してきた数少ないコメディアン (俳優業も兼ねる) である。ブルキナファソにおいて 27 年間続いてきたコンパオレ政権は、長期にわたるアフリカ有数の権威主義的な政権として知られるが、芸能に関しては同国がアフリカを代表する映画祭である FESPACO (Festival Panafricain du Cinéma de Ouagadougou : ワガドゥグ・パンアフリカ映画祭) のホスト国であり、政権非難を直接の目的にするようなものでない限りは、「芸」としての表現に関しては一定の寛容性を示してきた。

「ウエドラオゴ閣下」は大統領や他の大物政治家のモノマネをする時は細心の注意を払ってネタ作りをしてきたと語った。同氏によれば、政治家や大統領のモノマネを行う場合、ネタにされた本人さえも笑えるものにすること、また特定の立場の人だけが笑い、他の立場の人々が不快な思いをすることがないように、その場でパフォーマンス見た人全員が笑えるようにすることに最も腐心してきた。それでも、同氏は大統領の物まねをする時は怖かったと語った。そして、単に誰かを貶めるだけの安易な「笑い」に走らないように、厳しく自分を律してきた。そこには自らの身を守る目的はあるが、笑いのパフォーマンスのネタにする人物に対しても尊敬の念を忘れないこと、そして社会的弱者は決してネタにしないという哲学を持って活動してきた<sup>50)</sup>。



図 8 : ジェラルール・ウエドラオゴ閣下と筆者  
(撮影日) 2014 年 8 月 20 日, ワガドゥグ

2014 年 10 月の政変を挟んで、半年ぶり (2015 年 2 月) にウエドラオゴ氏 (閣下) に面会することができた<sup>51)</sup>。前回のインタビュー後に、予想外のタイミングで起きたブルキナファソの政変によって、これまでモノマネのネタにしてきたコンパオレ大統領の退任と国外脱出が、ウエドラオゴ氏の芸能活動や日常生活に暗い影を落としているのではないかと気がかりであった。大統領の事実上の失脚によって、モノマネのネタであったコンパオレ前大統領への抗議運動の中で巻き添えになったのではないかと心配していた。しかし、幸いなことに、筆者の懸念は全くの杞憂に終わった。それは、嬉しい誤算であった。前述のように、ウエドラオゴ氏の芸人としての一貫したポリシーによって自身の身を守ったとも言える。

筆者と再び面会する直前 (2015 年 1 月 30 日, ワガドゥグ) に行われたストリート・ライブで、コンパオレ前大統領絡みの新ネタ披露した。大まかな内容としては、「亡命先のコート・ジボワールで当地の主食アチケ (Attiéké, キャッサバから作られる) ばかり食べているので元気が出ない。」というような話をコンパオレ大統領のモノマネで語ったところ、聴衆の反応は大受けだっ



た。



図9：亡命後の前大統領に関する風刺画

(出典) *Journal du Jeudi*, No.1246 (August 6-12, 2015) <sup>52)</sup>

ウエドラオゴ氏自体も、よもやコンパオレ政権がこれほどもろく崩れ去るとは予想していなかった。そして、27年間も続いた前政権との「健全」な距離感の維持に神経をすり減らしてきた。そこには、金銭を含めて様々な誘惑がつきまとう。しかし、これまで慎重に行動してきた結果、政変後も従来通りにコメディアン（役者）としての活動ができている。仮に、前政権下において権力に擦り寄っていたら、こうはいかなかっただろうと語ってくれた。

## 5. むすびに代えて

小稿では、「笑い」という人間の営みに焦点を合わせて、アフリカ政治の変容について考察してきた。冒頭で述べたように、笑いというテーマに関して追求すればするほどその深淵さと多様さに立ちすくむばかりとなる。そこで、小稿においては考察対象を「アフリカ政治」の重大な変化の局面における笑いに限定した。それでもなお、その複雑さと理論的な一般化の難しさに、理解の不十分さを突きつけられ、途方にくれながら笑うしかなかった。

しかし、小稿における限られた考察においてさえも、アフリカにおける政治と笑いとの間には密接な連関が存在し、研究対象としての意義や親和性があることを見て取れた。特に、この20年あまりの間、軍事政権や一党制から、民主化、紛争、破綻国家まで、目まぐるしく展開するアフリカの政治変容と連動しながら、政治に関連する笑いにも変化が生じた。民主化を通じた政治の自由化は、笑いの自由化をももたらした。逆に、民主化の頓挫は、政治における笑いをより諦めと皮肉交じりのものにした。

笑いにフォーカスしてアフリカ政治の理解を試みるという、これまでの政治研究においてほとんど見られなかったアプローチを採ることには、当然のことながら強みだけでなく、少なからず曖昧さや限界を伴うものである。

強みとしては、物理的要素に基づく権力関係を軽視するものではないものの、それ以外の側面から政治変容を考察することを可能にする点が挙げられる。国家機関、職業として政治活動をするアクター、ジャーナリズムとは異なった、より人々の日常生活に寄り添った視点から、



笑いの変化を通じたアフリカの政治変容の一側面を描きだすことが可能になる。ハイポリティクスだけではない「下からの政治」のようなアプローチを視野に入れながら、アフリカ政治を捉え直すための一つのアプローチとなりうると考えられる。

一方で、笑いという観点からアフリカの政治変容を理解しようとするアプローチには限界や課題も少なからず存在することを認めなければならない。小稿で注目するような社会状況を映し出す鏡としての「笑い」は、アフリカの政治状況を直接的にかつ正確に投影するとは必ずしも言えず、政治分析のアプローチとしては限界もある。加えて、現在との比較のための過去の資料に関しては、アフリカ各国において笑いに関する様々なテキスト・映像資料が十分に保存されてこなかったため、資料収集面での制約が伴う。加えて、笑いという側面から政治変容をどこまで解き明かすことができるかという分析アプローチとしての適合性に関する課題もある。さらに、笑いの質的变化の線引きの根拠、言語圏の壁、そして笑いという研究対象と倫理との兼ね合いも、笑いを通じて政治変容を考える場合において軽視できる課題ではない。

小稿における考察は、アフリカ政治と笑い（人間の暮らし）との関係を理解するための入口の段階にすぎない。笑いという営み自体の深遠さとめまぐるしく変化するアフリカの社会・政治状況の流動性を考えると、笑いというレンズを通してアフリカ政治の変容を理解するという研究アプローチの入口から見える極めて魅力的な景色とは対照的に、その先にどのような出口にたどり着くのか、見通しは全く立っていない。笑いという行為に関する包括的な理解すら存在しない現状においては、それはある意味で当然のことと思われる。このような完成の見込みの低い研究テーマを選択することへの躊躇はあるものの、たとえ未完成で終わるとしても、それでもなおアフリカの政治（社会）と人々の暮らしとの関係の理解を深めるためには、避けては通れない挑戦であると筆者は考えている。

笑いは、社会の変化を反映する鏡である。しかし、時代、文化、政治的立場が異なれば、見え方が幾重にも異なる万華鏡でもある。

## 注

- 1) 本稿は、日本アフリカ学会第52回学術大会（犬山市，2015年5月24日）における発表内容（「アフリカの政治変容と笑い-ベナン・ブルキナファソ・トーゴの事例を中心に-」）をもとに執筆した。
- 2) 一時期（1990年代終わりから2000年代前半まで）、筆者はトーゴにおいて民主化を主な研究テーマとしてフィールド調査を行っていた。当時のトーゴは、軍人出身の一人の指導者（Gnassingbé Eyadéma，在任1967～2005年）が、軍と経済を一手に支配するアフリカ諸国の中でも最も長期にわたる強固な権威主義的政権として知られていた。このようなアフリカ諸国における最も抑圧的な政権下にあっても、フィールド調査中、筆者は毎日のように人々の笑いの瞬間に遭遇してきた。時に、人々は政治をテーマにして笑いを作り出していた。
- 3) 日常生活にも溢れる笑いといういわば人間の本質に関わる研究テーマは極めて壮大であり、かつ深淵である。笑いという人間の行為に関する考察は、数千年にわたり、生態学、心理学、精神分析学、哲学、社会学など、様々な観点で行われてきた。本研究においても他の学問分野における研究成果や知見に真摯に学ぶことが必要であると考えている。
- 4) くすぐりなどの外部からの物理的刺激に対して反射的に起きる笑いも含まれる。
- 5) バルクソンによる笑いの理解のアプローチは意表を突いている。笑いという題材を取り上げるとき、滑稽さの諸形態の共通分母を探そうとするのではなく、「笑いの製造方法」を記述しようとする（ジリボ

ン 2010 : 18-20)。

- 6) 本研究においては人間の行為に限定されるが、笑いは人間以外の動物にも認めうる行為でもある。
- 7) Oxford Dictionaries website, <http://www.oxforddictionaries.com/definition/english/laugh> (2014 年 6 月 13 日アクセス)。
- 8) 中世初期のヨーロッパでは笑いが悪魔のようなものと考えられ、抑圧された。修道院の規律の制定者たちは、笑いと身体、笑いと口、笑いと性的快感を関連づけた。中世中期には、統制されつつも笑いの解放が始まった。そこでは、良い笑いと悪い笑いとに区別されるようになる。中世末期になると、「都会の人々は中世の教会に強要された笑いの抑制から解放され、町は公共広場の笑いやカーニバル的笑いで満ちていた。」(スマジャ 2011 : 26-27)。中世の教会のカーニバルは、階級制度の秩序の一時的な転倒をもたらすものでもあった(ユング 1974 : 259)。
- 9) ブルデューは物理的な力関係を背景としながら、それによって生じた服従、行動の制約を正統なものであると認識させる仕組みや作用を明らかにしようとした。「象徴権力」という概念においては、暴力装置によって作用する権力は、個人、集団において行動を規制する外的要因として認識されるのに対して、象徴権力はある特定の権力としては認識されにくく、日常的な社会生活にまで浸透しながら、象徴を通して抑圧ではなく正統性(権威)として作用する。そして、一部のグループの象徴を公式化することで権力が制度化される(Bourdieu: 281-283, 286-287)。
- 10) 「下からの政治」研究は、1980 年にバヤール(Jean-François Bayart)らを中心に、フランスの国際関係研究所(Centre d'Etudes et de Recherches Internationales : CERI)の「政治行動の大衆様式」(Mode populaire des actions politiques)研究グループにおいて開始された(Bayart 1992 : 9)。「下からの政治」研究はフーコー(M.Foucault)、ドゥルーズ(G.Deleuze)、ドゥ・セルトー(M. de Certeau)、ブルデュー(P.Bourdieu)らフランス現代思想に関わる研究から強い影響を受けた(Bayart 1992 : 13)。バヤール、ンベンベ(A.Mbembe)、トゥラボ(C.Toulabor)による共著『ブラックアフリカにおける下からの政治』(*Le politique par le bas en Afrique noire*, Karthala, Paris, 1992)という著作が「下からの政治」研究の帰結点である。
- 11) 1980 年代初めにフランスのアフリカ政治研究者に大きな影響を与えた「下からの政治」研究であったが、時間とともに強い批判も受けるようになった。主な批判として、フランス現代思想に過度に依存し、不必要に詩的で難解な用語を振り回すこと、大衆の政治的ふるまいを過大評価していることなどが指摘された(岩田 2006 : 174)。
- 12) ヴォドゥンとは、ヨルバ語由来で神、神々を意味する。それらの見えない力に人間を調和させる宗教的実践活動である(*Culture et tradition du Bénin, Le Guèlèdè, le Vodoun* : 68)。ジャマイカなどのカリブ海の国々で売られた奴隷の子孫たちによって実践されているブードゥー(Voodoo)の起源である。ヴォドゥン信仰は、多彩な神格の世界観、霊媒をととして活動する霊的存在、憑依やダンスで可視化されるパフォーマンスなどの特徴を持つが、何よりもモノをめぐる人の実践からなる信仰形態である(田中 2009 : 3)。ヴォドゥンとは、霊的存在と憑依などで交流するとともに、多彩な祠、祭壇、呪物をめぐる信仰である。また、霊に憑依された人や、それを祀る営みもヴォドゥンと呼ばれる。儀礼をととして人々はヴォドゥンと関わり、更新し、作成し、貨幣によって売り買いしている(田中 2009 : ii-iii)。
- 13) ラディンによれば、トリックスターの特徴は次のように示されている。「トリックスターは創造者であって破壊者、贈与者であって反対者、他をだまし、自分がだまされる人物である。彼は意識的には何もしない。抑えつけることのできぬ衝動からのように、彼はつねにやむなく振舞っている。彼は善も悪も知らないが、両方に対して責任はある。道徳的、あるいは社会的な価値は持たず、情念と食欲に左右されているが、その行動を通じて、すべての価値が生まれて来る」(ラディン 1974 : 9-10)。
- 14) Monde Blog (Radio France Internationale), <http://afro-moderne.mondoblog.org/2014/01/12/le-vodou-legba-un-dieu-singulier-de-la-galaxie-vodou> (2014 年 7 月 10 日アクセス)
- 15) 「ヨルバのエシュ=エレグバに由来するダオメのレグバは、新大陸の黒人文化の中で様々に形を変え

- て生きながらえた。ハイチのヴォードゥー教では、レグバと同じ名で呼ばれ、どの神と交信する場合にも、その「道を開く」精霊となり、ヴォードゥーの祭祀が執行される時に最初に貢物を受ける神である」(山口2003:144)。
- 16) レグバの中でも、鍛冶場、鍛冶職人の家屋にいるとされる「グ」(Gou, Gu, Ogu)と呼ばれる精霊の存在がある。金属、特に鉄にまつわる仕事(鍛冶職人、農民、戦士、獵師、漁師、床屋など)、そこから軍事力、技術などを連想させ、人々から多に畏怖されている(*Culture et tradition du Bénin*:88)。
- 17) BBC Africa Buisness Report, “Africa’s lucrative comedy business,”  
[http://www.bbc.com/news/business-32174404?post\\_id=100000615039028\\_944133495617143](http://www.bbc.com/news/business-32174404?post_id=100000615039028_944133495617143) (accessed April 3, 2015).
- 18) アフリカのコメディアン国際的な活動において、ソーシャルメディアの果たす役割に重要性が増している。ウガンダの女性コメディアン Kansiime Anne は、ユーチューブにアップロードした動画とフェイスブック (<https://www.facebook.com/pages/Kansiime-Anne-Entertainer/263758240421584>) と連動させて国際的な知名度を上げながら活躍の場を広げている。
- 19) 本名は Gérard Ouédraogo 氏、大統領のモノマネ以外の芸能活動として、スタンドアップトーク芸やコメディードラマに多数出演してきた。
- 20) <https://www.facebook.com/#!/Son-Excellence-Gérard-Ouedraogo-497759470338909> (2015年2月10日アクセス)
- 21) République Très Très Démocratique du Gondwana facebook (<https://www.facebook.com/pages/R%C3%A9publique-du-Gondwana/112041662188095>), Radio France Internationale website (<http://www.rfi.fr/emission/20150209-securite-de-president-fondateur>) (2015年2月10日アクセス)
- 22) Blog of Mamane, [http://mamane.over-blog.fr/pages/Presengohutation\\_de\\_IHumoriste-4567828.html](http://mamane.over-blog.fr/pages/Presengohutation_de_IHumoriste-4567828.html) (2014年1月9日アクセス)
- 23) コート・ジボワールを代表するコメディアンのゴウによる一人コント “le Cadavre” (死体)。内戦終了によって、死体洗い業の男が生活に困っているところに、一体の死体が運ばれてくるところから始まるコント (キンシャサで上演, 2012年6月9日)。 <https://www.youtube.com/watch?v=iARGZjnfjo> (2014年7月20日アクセス)
- 24) <https://www.facebook.com/Festival-du-rire-de-Lubumbashi-409065272523249> (2013年4月20日アクセス)
- 25) Kader Nemer’s website, <http://www.kadernemer.com/la-republique-tres-tres-democratique-du-gondwana> (2014年1月12日アクセス)
- 26) Africulture website, <http://www.africultures.com/php/?nav=personne&no=26430> (2014年1月9日アクセス)
- 27) Blog of A komatsri Lola, <http://akomatsrilola.blogvie.com/2009/10/07/interview-de-mamane-%E2%80%93-humouriste-et-chroniqueur-sur-rfi> (2014年1月8日アクセス)
- 28) ママヌ自身は、近い将来の取り組みとして英語を公用語とするアフリカ諸国に進出することも視野に入れている。Interview of Mamane, African comedian Mamane on his political satire, the Very, Very Democratic Republic of Gondwana (updated June 9, 2015), <https://www.youtube.com/watch?v=Yo8IUxAmJNk> (2015年6月24日アクセス)
- 29) ベナン、ブルキナファソ、トーゴの政治過程全般については、岩田(2004, 2006, 2008a, 2008b, 2010)を参照。
- 30) <https://www.facebook.com/FondationMathieuKerekou?fref=ts> (2014年8月7日アクセス)
- 31) 国民会議を通した民主化プロセスについては、岩田(2004)を参照。
- 32) 現地調査中、このカレンダーを見せながらにベナンの人々と雑談を行った(2006年3月)。
- 33) 2014年7月、ヤイ大統領は任期終了をもって大統領職から退任することを発表した。
- 34) エヤデマ大統領は現職のまま2005年2月に病死した。その死を受けて、超法規的に息子のフォール・

- ニャシンベ（Faure Gnassingbé）が大統領に就任した。実質的な権力の世襲に対する抗議運動は暴動に発展し、軍隊による鎮圧の末、多数の死傷者と隣国への難民を生み出した。アフリカの地域機関（AU, ECOWAS）や国際社会による強い圧力を受けて、同年4月に大統領選挙が実施されたものの、対立候補の立候補を認めないなど問題の多い選挙の結果、ニャシンベが当選した。岩田（2005）を参照。2015年にはニャシンベが野党から選挙の不正さを非難されながらも三選を果たした。
- 35) 王政以外のアフリカ諸国の中で長期政権ののちに実質的な権力の世襲が行われた国として、トーゴ以外にはガボンが挙げられる。
- 36) トーゴにおいては、エクスタシー感をもたらすカーニバル的な振り付けをとまなう、踊りや歌唱の制度化された一団によって執り行われ、政権の創始者であるエヤデマ將軍を神話化し、暴力によって成立した政権を正統化させることを目的とした活動である（Toulabor 1986：15, 193）。複数のアニメーション専門団体が創設され、相互に競争させることによって、政権への忠誠心を高めようとした（Toulabor 1986：215-220）。
- 37) フロイトによれば、「初期段階の幼児には、排泄機能を恥ずかしがったり、排泄物を嫌がる様子はまだない。幼い子どもたちは、体のいろいろな部分に興味を示すのと同じように、排泄機能や排泄物にも非常に興味を示す。（中略）排泄物は自分の体の一部だ、自分の体が作り出したものだと考えるので、排泄物を尊重する。（中略）しつけの影響で、子供の嗜糞の本能や嗜糞の成功は徐々に抑圧されていく。そして、それを隠すようになり、恥ずかしがるようになり、糞便に嫌悪感を持つようになる。」（フロイトによる「序文」カプラン編『スカトロロジー大全』：15）。バフチーンによれば、グロテスク・リアリズムの全形式を成り立たせている民衆の笑いは、対象を格下げし、物質化させる（バフチーン 1980：25）。「糞のイメージは、グロテスク・リアリズムにおいては、主として陽気な物質である」（バフチーン 1980:197）と述べているように、糞便化を通じた愚弄には不徹底な部分もあるとも言えるかも知れない。
- 38) 2012年4月、ニャシンベ大統領は一旦RPTを解党し、かつての野党の有力者を取り込みながらUnion pour la République（Unir, Union for the Republic）へと改編した。その動機として、古く硬直したRPTに対する人々の支持低下に対する大統領の懸念があった。Jeune Afrique website, “Togo : le RPT est mort, l’Unir lui succède,” <http://www.jeuneafrique.com/176500/politique/togo-le-rpt-est-mort-l-unir-lui-succ-de> (2015年6月13日アクセス)
- 39) フランス語で中国を意味する「Chine（シーヌ）・Chine」と掛け声を出したと誤解して、エヤデマはそれに呼応して「トーゴ・トーゴ」と返したとされる。
- 40) 詳しくは岩田（2008b）を参照。
- 41) やがて政治分析アプローチとしての「下からの政治」は、政治的変化の理解に対応できないという批判にもさらされたものの、民主化運動の中で政治的変化に影響を及ぼす可能性もあった。そして、民主化による政治環境の変化に応じて「下からの政治」自体も変化した（岩田 2006：188）。
- 42) サンカラ政権時代のブルキナファソの政治状況の再考については、拙著（岩田 2008a）を参照。
- 43) 政変に近い時期の筆者の現地調査中（2015年8月に実施）のインタビューの中で、国内野党勢力でさえも、コンパオレ政権の終焉を期待しながらも、この時期に政権が崩壊すると予想できた者はいなかった。
- 44) 元側近達はコンパオレ大統領との対決姿勢を鮮明に示した。2010年の大統領選挙の際、側近たちはこれが最後の任期となることについて、コンパオレ大統領から取り付けていた約束が反故にされたことによる幻滅が与党幹部の大量離反を招いたとも言われる（2014年8月20日、MPP関係者からの聞き取り、ワガドゥグ）。
- 45) 筆者自身は、コンパオレ体制を支えてきた側近が大量離脱したことにより、憲法修正の後に2015年末に予定されていた次回の大統領選挙に当選した後、ほどなく合法的な政権交代の可能性が断たれたことを契機に、統制が効かなくなっていた軍によってクーデタが起こされ、政権が転覆するだろうと推測していた。



- 46) しかし、このデモは統制のとれたもので、政府関係機関・与党幹部の自宅以外への放火や略奪行為はほとんど行われなかった。しかも、デモの翌日には市民総出でワガドゥグ市内の自主的清掃を行うなど、人々のモラルは保たれ、懸念された国内の無秩序状態には陥らなかった。
- 47) 2015年9月16日、ディエンデレ（Gilbert Diendéré）将軍が率いるRSPの部隊が閣議中の大統領府に侵入し、クーデタを敢行した。大統領、移行政府首相、閣僚を拘束し、国営テレビを通じて、移行政府の解消と、自身の国家元首就任を宣言した。しかし、国外からの強い抗議、特に国内では最強のエリート部隊とされたRSPに対しても人々は抵抗を続け、民間ラジオ局も施設の破壊を受けながらも情報発信を続けた。モシ人の王として尊敬を集めるモロナバ（Moro-Naaba）、西アフリカ諸国経済共同体（ECOWAS）の首脳、アフリカ連合（AU）、国際社会による仲介や圧力の結果、ディエンデレ将軍は権力をカファンド大統領に戻し、難色を示しながらも最終的にはRSPの武装解除とブルキナファソ軍の支配下への移行を受け入れた。
- 48) 政権移行暫定政府に大統領、首相、閣僚、評議会議員として参画したものは、民主化移行後に実施される大統領選挙には出馬する権利は認められない。
- 49) 本稿の構想段階においては、ブルキナファソに関しては長期政権下における政治の変化に対して、いかにして人々は笑いとともに生きてきたのかを描写することを予定していた。
- 50) ジェラルド・ウエドラオゴ氏とのインタビュー（2014年8月20日、ワガドゥグ）
- 51) ジェラルド・ウエドラオゴ氏とのインタビュー（2015年2月4日、ワガドゥグ）
- 52) Journal du Jeudi website, [http://www.journaldujeudi.com/1246/fs\\_semaine\\_archive.htm](http://www.journaldujeudi.com/1246/fs_semaine_archive.htm)（2015年8月15日アクセス）

#### [参考文献・資料]

- 岩田拓夫（2010）『アフリカにおける地方分権化と政治変容』晃洋書房。
- 岩田拓夫（2008a）『アフリカの革命政権再考—トマ・サンカラが遺したもの—』宮崎大学教育文化学部紀要（社会科学）、第19号、1-23頁。
- 岩田拓夫（2008b）「対照的な民主化の歩み—ベナンとトーゴ—」池谷和信、武内進一、佐藤廉也編『朝倉世界地理講座 12—アフリカ II—』朝倉書店、782-793頁。
- 岩田拓夫（2006）「アフリカにおける「下からの政治」」川端正久、落合雄彦編著『アフリカ国家を再考する』晃洋書房、171-194頁。
- 岩田拓夫（2005）「エヤデマ将軍の死に揺れるトーゴ」『アフリカ』（アフリカ協会）、5月号、4-10頁。
- 岩田拓夫（2004）『アフリカの民主化移行と市民社会論—国民会議研究を通して—』国際書院。
- 岩田拓夫（2003a）「エヤデマイズムの現在—象徴権力の観点からの試論—」『アフリカ研究』（日本アフリカ学会）、第62号、57-63頁。
- 岩田拓夫（2003b）「トーゴの大統領選挙—エヤデマ「終身」大統領への道—」『アフリカレポート』（アジア経済研究所）、第37号、43-47頁。
- 岩田拓夫（2002）「エヤデマ体制における内部崩壊の危機」『月刊アフリカ』（アフリカ協会）、11月号、14-18頁。
- 岡崎彰（2003）「「銃」と「笑い」—アフリカの或る二つの「解放運動」—」『神奈川大学評論』第45号、88-97頁。
- 小川了（1985）『トリックスター—演技としての悪の構造—』海鳴社。
- キケロー著、大西英文訳（2005）『弁論家について』岩波文庫。
- ジリボン・ジャン＝リュック著、原章二訳（2010）『不気味な笑い—フロイトとベルクソン—』平凡社。
- スマジャ・エリック著、高橋信良訳（2011）『笑い—その意味と仕組み—』白水社。
- 田中正隆（2009）『神をつくる』世界思想社。



- バフチン・ミハイル著, 川端香男里訳 (1980) 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』 せりか書房。
- 平野克己 (2013) 『経済大陸アフリカ』 中公新書。
- ベルクソン・アンリ著, 林達夫訳 (1976) 『笑い』 岩波文庫。
- ボーク・ジョン著, カプラン・ルイス編, 岩田真紀訳 (1995) 『スカトロロジー大全』 青弓社。
- ホップス・トマス著, 水田洋 (1993) 『リヴァイアサン (第一部)』 岩波文庫。
- 山口昌男 (1974) 「解説:今日のトリックスター論」 ラディン・ポール他著, 皆河宗一他訳 『トリックスター』 晶文社, 279-306 頁。
- 山口昌男 (1990) 『笑いと逸脱』 筑摩書房。
- 山口昌男 (2003) 『アフリカー山口昌男著作集』 筑摩書房。
- 湯田豊 (1999) 「笑いの預言者—ツァラトゥストラ—ニーチェの笑いの構造—」 小馬他編 『笑いのコスモロジー』 勁草書房, 101-131 頁。
- ユング・C・G, 「トリックスター像の心理」 ラディン・ポール他著, 皆河宗一他訳 (1974) 『トリックスター』 晶文社, 257-277 頁。
- ラディン・ポール他著, 皆河宗一他訳 (1974) 『トリックスター』 晶文社。
- Banégas Richard (2003), *La démocratie à pas de caméléon - Transition et imaginaires politiques au Bénin* -, Karthala, Paris.
- Baudelaire Charles (1855, 2012), *De l'essence du rire*, Edition Sillage, Paris.
- Bayart Jean-François et al., eds. (1992), *Le politique par le bas en Afrique Noire*, Karthala, Paris.
- Birnbaum Jean ed., (2011), *Pourquoi rire?* Gallimard, Paris.
- Bourdieu Pierre (2001), *Langage et pouvoir symbolique*, Seuil, Paris.
- Carnets de la Fondation Atef Omais (2011), *Culture et tradition du Bénin - Le Guèlèdè, le Vodoun* -, Editions Sépia, Condé-sur-Noireau.
- Chabi Maurice (2013), *Il était une fois un caméléon nommé Kérékou*, Harmattan, Paris.
- Gauvard Claude (2011), "Rire et dérision dans la résolution des conflits au Moyen Age," in Birnbaum Jean ed., *Pourquoi rire?* Gallimard, Paris, pp.89-104.
- Herzog Rudolph (2006), *Rire et Résistance - Humour sous le 3<sup>e</sup> Reich* - (translated by Robert Darquenne from German to French text, in 2013), Michalon, Paris.
- Iroko Félix A (2001), *Le président Mathieu Kérékou - Un homme hors du commun* -, Les Nouvelle Editions du Bénin, Cotonou.
- Kourouma Ahamadou (1998), *En attendant le vote des bêtes sauvages*, Editions du Seuil, Paris.
- Mongo-Mboussa Boniface (1998), "Entretien avec Ahmadou Kourouma," *Africulture*, No.12, pp.42-45.
- Morreall John ed., (1987), *The Philosophy of Laughter and Humor*, State University of New York Press, Albany.
- Noguez Dominique (2011), "L'humeur contre le rire," in Birnbaum Jean ed., *Pourquoi rire?* Gallimard, Paris, pp.155-170.
- Peker Julia (2011), "Rire et transgression," in Birnbaum Jean ed., *Pourquoi rire?* Gallimard, Paris, pp.65-76.
- Saint-Michel Serge, Dominique Fage (1976), *Histoire du Togo - Il était une fois... Eyadéma* -, Afrique Biblio Club, Brussels.
- Steiner George (2011), "Le rire ou le sourire?" in Birnbaum Jean ed., *Pourquoi rire?* Gallimard, Paris, pp.11-21.
- Schaeffer Jean-Marie (2011), "Rire et blaguer," in Birnbaum Jean ed., *Pourquoi rire?* Gallimard, Paris, pp.23-37.
- Toulabor Comi M (1986), *Le Togo sous Eyadéma*, Karthala, Paris.
- Toulabor Comi M (1991), "La dérision politique en liberté à Lomé," *Politique Africaine*, No.43, pp.136-141.

Toulabor Comi M (1992), "Jeu de mots, jeu de vilains. Lexique de la dérision politique au Togo," in Bayart Jean-François et al., eds., *Le politique par le bas en Afrique Noire*, Karthala, Paris, pp.109-130.